

# 参加型計画論における行動科学的アプローチの意義

## 集落計画づくりを規定する要因の分析

### Significance of behavioral science approach in participatory rural planning

#### Analysis on influential factors of community planning

星野 敏\*

Satoshi Hoshino\*

( \*神戸大学 農学部 )

( \*Faculty of Agriculture, Kobe University )

## はじめに

農村計画分野において、住民参加型計画論は1970年代から登場した後、様々な試行が積み重ねられ<sup>注1)</sup>、今日、農村計画の一般的なスタイルとして「市民権」を確立したといえる。この間、様々な計画づくりの手順や手法が提案され、住民参加型あるいは住民主体型の計画づくりが幅広く受け入れられてきたが、反面、その問題点や限界も明らかになりつつある<sup>注2)</sup>。参加型で計画をつくったからといって必ずしも実効性のある計画ができるわけではないのである。では、住民参加型計画論の今後の発展方向をどのように見定めるべきなのか？これが筆者の問題意識である。

本来、農村計画とは「地域における問題解決」である。もし、計画が合理的に策定されたものであるならば、問題解決学の論理、つまり問題 - 原因 - 解決方策を因果的に結びつける論理に従っているはずである。このように問題解決の論理的整合性を重視し、それを計画づくりに一貫させることを一義的な目的とする計画論のスタイルをここで「論理的アプローチ」と呼びたい<sup>注3)</sup>。

前報<sup>注4)</sup>では、「良い解決策が示された計画」の作成も重要であるが、それと同等以上に、計画づくりの過程で住民の意欲をどれだけ啓発できるかということが計画の成否を左右する重要な課題であることを不十分ながらも明らかにした。計画づくりの過程における住民の意欲の重要性は、従来の論理的アプローチの方法論的限界を示唆する一

例である。

論理的アプローチからの計画論が重要である点は基本的に変わらない。しかし参加住民の立場からみると、論理的な合理性を強く意識して計画づくりに参加している訳ではない。実際、参加者は計画づくりを「地域問題の解決の場」というよりも、むしろ種々の集落行事（活動）の中の一つとして理解して参加している可能性が強い。また、計画づくりの過程での意見、判断、評価はその場の状況や参加者自身の思惑に応じて、かなり流動的である。

このような側面に注目すれば、論理的アプローチとは異なるアプローチから計画論のあり方を模索する必要がある。それは、計画づくりのプロセスを「思惑をもった関係主体（住民や計画組織、行政）が相互に影響及ぼしながら織りなすドラマ」ととらえ、それぞれの主体の心理や行動の動的な変容とその背景にある社会的・制度的条件を解析するアプローチである。このようなアプローチを「行動科学的アプローチ」と呼びたい<sup>注5)</sup>。行動科学的アプローチとは、地域づくりの過程で、関係する各主体の決定や行動及びそれらを規定する諸要因<sup>注6)</sup>を社会学的、心理学的、人類学的な視点から分析・考察する接近方法を指している。

本論の課題は、行動科学的アプローチの存在意義（必要性、有用性）を示すことである。そのために、論理的アプローチでは捨象されてきたが、行動科学的アプローチではキーコンセプトとしての役割が期待される指標（計画づくりに対する参

加者の意欲と社会的信頼)に着目し、それらが計画づくりを規定していることを明らかにしたい。

## 対象地区および分析の枠組み

### 1 対象地区と調査概要

神戸市北区の里づくり事業(神戸市独自の住民主体型集落活性化構想づくり)の対象地区であるKa集落(前報の対象地区の近隣集落)を対象にした。筆者は2002年度にアドバイザーとして同集落の里づくりに関与している。

2002年の12月に18才以上の住民全員を対象に里づくりアンケート調査を実施した。その目的は里づくり計画に取り入れられるべき重点課題(事業項目)を住民の意向に基づいて選択することであるが、このとき、本研究に必要な項目も合わせて質問した。表1はそのアンケート項目である。A群からD群までは、前報とほぼ同じ項目である。後述するようにE群とF群を新たに追加した。なお、サンプル数は210、回収率はおおむね100%である。

表1 アンケート調査項目

A群 フェイスシート：性別，年齢，職業，家族員，家族構成，役員経験など
B群 集落との関わり合いと定住意向：集落の自治活動や諸行事に対する主観的な評価，定住意向
C群 里づくりへの意欲：C1 関心の程度，C2 参加意欲
D群 活性化の方策：座談会などで出された活性化方策のアイデア28項目を対象にして，地区の活性化に照らして実施することが適当かどうかを5点満点(良い：5点⇔悪い：0点)で評価。
E群 計画づくりの理解度：里づくりについての事前説明の有無，集会参加の程度，住民主体型スタイルの賛否等
F群 信頼に関する心理学的調査(注)：20項目の質問を3つの信頼性尺度に加工したもの

注：F群の調査は任意回答としたため，サンプル数は112。

### 2 分析の枠組み

以下の3つの分析から構成されている(図1)。  
(分析1) 里づくりへの意欲と個別事業評価

分析1では、里づくりへの意欲が計画(個別事業項目)への評価を大きく作用することを明らかにする。これは前報の追試に相当する。里づくりへの意欲(C群2項目)と事業評価(D群28項目)の関連性をクロス集計によって確認する。前報お

よび本分析のいずれにおいても意欲の差による個別事業評価の相違が十分顕著であることを示し、行動科学的アプローチの意義を明らかにしえたと判断することにする。

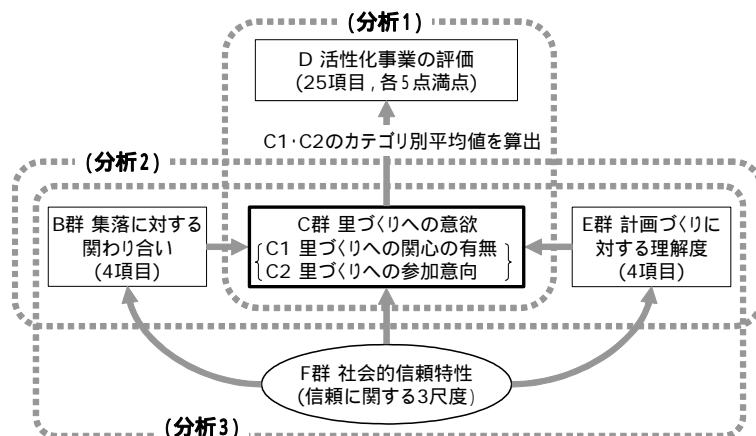


図1 分析の枠組み

#### (分析2) 里づくりへの意欲を規定する要因分析

里づくりへの意欲を規定する要因として、B群とE群を用意した。B群の項目は住民の集落に対する関わり合いの程度を示す項目であり、前報で「地域指向性」という概念でまとめた項目群と重複する。集落行事・慣習項目と定住意向の4項目からなる。一方、里づくり事業に対する理解度や里づくり集会への参加の程度も里づくりへの態度を規定する重要な要因であると考えられる。そこで、E群の4項目(E1 里づくり事業の事前説明の有無，E2 里づくり集会への出席の程度，E3 周辺の里づくり事例への評価，E4 住民主体型計画づくりのスタイルへの評価)を追加した。分析2では、そういった里づくりへの意欲を規定する要因(B群とE群)の影響度をクロス集計(B群⇔C群，E群⇔C群)により検証する。

#### (分析3) 社会的信頼特性の作用

近年、社会心理学分野で信頼に関する研究が進んでいるが、里づくりも人間の集団的行動であり、その集団を支える基本は他者に対する信頼(社会的信頼)であると共に、社会的信頼はソーシャル・キャピタルの構成要素でもある。いわば、分析2で用いた項目群の背景で作用する要因である。分析3では、信頼に関する特性(F群)と上述の3つの項目群(C群：里づくりへの意欲，B群：集落との関わり合い，E群：計画づくりへの理解度)

との間に如何なる関係があるのかをクロス集計により解明する。山岸<sup>注7)</sup>は、信頼の諸概念を図2および表2のように整理している。このうち、集団的行動への作用が期待される下記の3つの尺度を用いることにした。

**一般的信頼尺度**：この尺度は「相手の信頼性を判断する材料が何もない状態で、どれくらいその相手を信頼するか」という水準を計測する。特定の相手を前提としない。一般的信頼水準が高いほど、人間関係が開放的であり、新しい人間関係を構築するチャンスが高くなる。

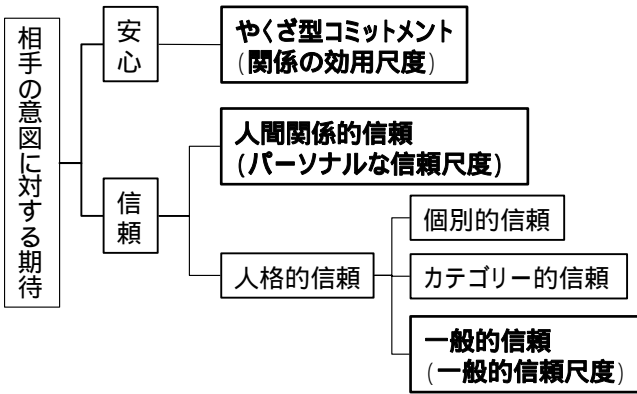


図2 信頼の諸概念(太字はF群の項目)

表2 信頼の諸概念の簡単な説明

やくざ型コミットメント	社会的な不確実性を低く抑えるために、特定の集団内部に形成される身内びいきの関係
人間関係的信頼(パーソナルな信頼)	お互いに親しい(好意的な態度や感情を持っている)から、相手を信頼する
人格的信頼	信頼に関する一般的な人格特性の評価
個別的的信頼	相手の高い人格(人間性)を熟知しているという理由から、相手を信頼する
カテゴリー的信頼	相手の社会的なカテゴリー(地位、職業、出身地等)から判断して、相手を信頼する
一般的的信頼	相手の信頼性の判断材料が何もない状態での相手に対する信頼のデフォルト水準

注：山岸(1998)注7)から抜粋の上、引用した。図2も同様。

表3 信頼に関する調査票の一部

1. ほとんどの人(文中の「人」は「世間一般の人」をさす)は基本的に善良で親切だと思いますか	非常にそう思う	少しそう思う	どちらとも言えない	少しそう思わない	全くそう思わない
2. 医者は、個人的な知人から紹介された場合、普通の患者よりも丁寧に診察すると思いますか	非常にそう思う	少しそう思う	どちらとも言えない	少しそう思わない	全くそう思わない

注：全部で20項目。山岸(1998)注7)の調査票を参考にした。

**関係の効用尺度**：この尺度は「現在の利益を保持するために(身内を)裏切らない」という水準を計測する。この性向が強いと、その社会は強い団結力(社会的紐帯)があって、内部の社会的な不確実性を低く抑えることができる。反面、外部に対し

ては閉鎖的であり、個々人の発展(新しい関係構築)の可能性を損なってしまうデメリットもある。

**パーソナルな信頼尺度**：この尺度は既に親しい関係にある特定の相手に対する信頼(人間関係的信頼)を計測する。「パーソナルな信頼」の根源は、「相手の人間性に対する信頼」や「相手が自分に好意を持っていることに対する期待」である<sup>注8)</sup>。

これらの概念は心理学的調査によって計測可能である。前掲の山岸らの研究を参考にして、個人の信頼に対する考え方(規範)をこれらの心理尺度によって計測し、それをF群の項目とした。

表3は信頼に関する心理学的調査票の一部である。「非常にそう思う」(5点)から「全くそう思わない」(1点)を便宜的に点数に変換し、同一尺度に対応する質問(各数個ずつ)の平均を算出し、それをもって回答者の信頼特性値(一般的信頼尺度、関係の効用尺度、パーソナルな信頼尺度による計測値)とする。

## 里づくり意欲を規定する要因の分析

### 1 事業項目の評価と里づくりの意欲

分析1の結果、28の事業項目に対する評価値は里づくりへの意欲水準(C1 関心およびC2 参加意欲)によって大きく左右されていた。図3はその一部である(C1⇔D群の図は割愛)。

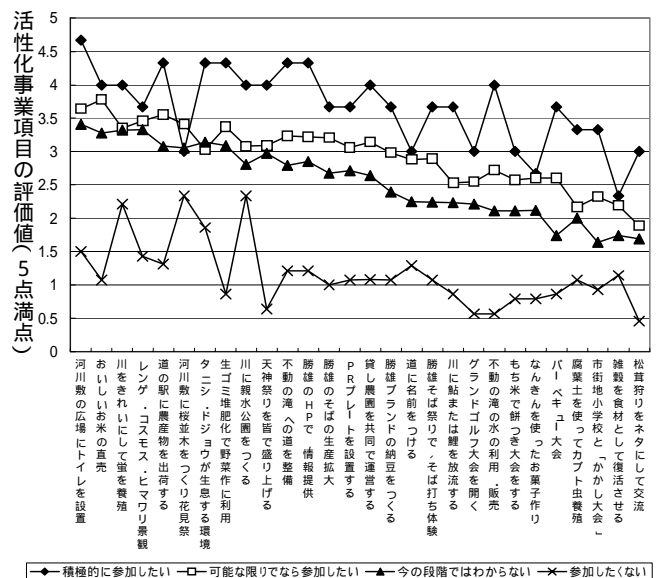


図3 里づくりへの参加意欲別にみた事業評価

里づくりへの参加意欲の相違によって大きな違いがあることが確認できた。この結果は、前報と一致する。つまり前報と同様の議論によって、住民の計画づくりへの意欲を向上せしめることが、よい計画案をつくることと同様に重要であることを示唆している。この結果によって行動科学的アプローチの必要性が再確認できたと判断する。

## 2 集落との関わり合い・定住意向の影響

図4は分析2の前半の結果(B群⇔C群)を示している。個々のクロス集計結果は確認しているが、ここではCramerのV係数を用いて項目間の関連強度を図示した。

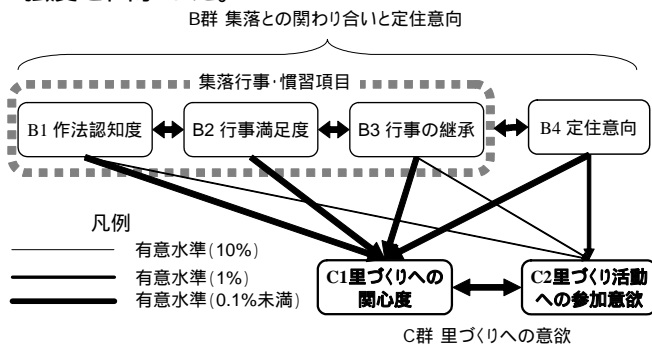


図4 集落との関わり合い・定住意向の影響

集落との関わり合いを示す B1 集落の作法認知度(高), B2 集落行事に対する満足度(高), B3 集落行事・慣習の継承意向(高)は相互に強く関連<sup>注9)</sup>していた(カッコ内は方向性を示す)。また、それら3項目(高)と B4 定住意向(強)の間にも強い関連性が確認できた。これらのB群の項目のいずれもが C1 里づくりへの関心(高)と強く関連していた。また、C2 里づくり活動への参加意欲(高)ともおおむね有意な関連性があった。これを具体的に書けば、次の通り。本事例の場合、「定住志向が強く、集落内の作法を良く認知し、各種行事・慣習に対する満足度が高く、かつそういった行事や慣習を今後も継承してゆくべきだと考えている人が里づくりに対しても意欲が強く、積極的である」。

## 3 計画づくりの理解度の影響

図5は分析2の後半の結果(E群⇔C群)である。前項と同様、CramerのV係数で判定した。計画づくりに対する理解度の4項目相互の関連性を確かめたところ、E1 里づくりに対する事前説明の有無, E2 集会出席の有無, E3 周辺事例についての評価の3項目は相互に強く関連していたが、E4 住民主体型計画づくりのスタイルへの評価だけは他の3項目と全く関連がなかった。しかし、E4はB群の各項目と強い関連性<sup>注10)</sup>があった。住民主体型計画づくりのスタイルがスムーズに受け入れられるためには、住民側に一定の素地(集落自治とのある程度の関わり合い)が必要であることを示唆している。

る, E1 里づくり事業の事前説明の有無, E2 里づくり集会への出席の程度, E3 周辺の里づくり事例への評価の3項目は相互に強く関連していたが、E4 住民主体型計画づくりのスタイルへの評価だけは他の3項目と全く関連がなかった。しかし、E4はB群の各項目と強い関連性<sup>注10)</sup>があった。住民主体型計画づくりのスタイルがスムーズに受け入れられるためには、住民側に一定の素地(集落自治とのある程度の関わり合い)が必要であることを示唆している。

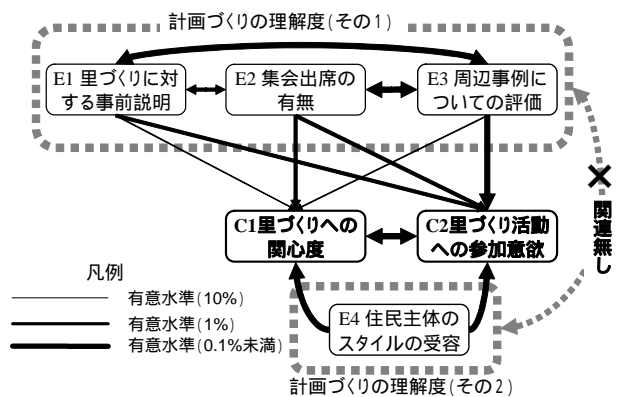


図5 計画づくりの理解度の影響

一方、E4を含め、計画づくりの理解度に関する4項目(E群)はいずれも里づくりへの意欲(C群)と強く関連していた。つまり、計画づくりへの理解度の良否は、住民の里づくりに対する取組姿勢を左右するもうひとつの重要な要因であった。このように里づくりに対して積極的な態度を形成するためには、計画づくりの意義を住民に徹底することが必要条件である。

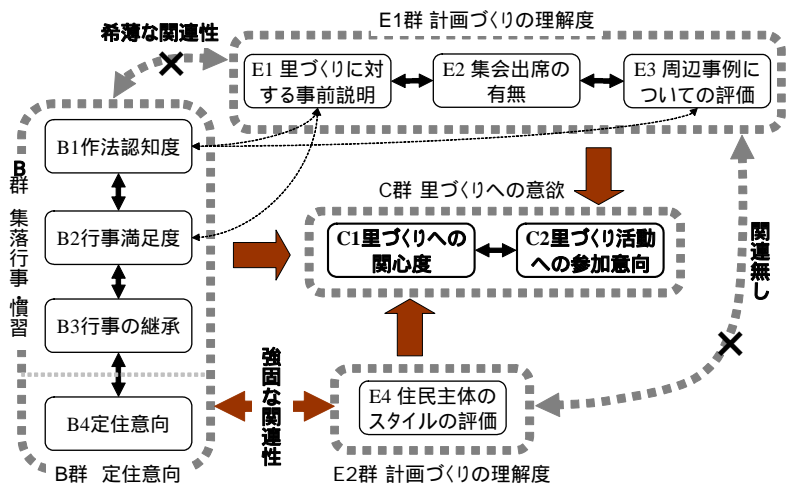


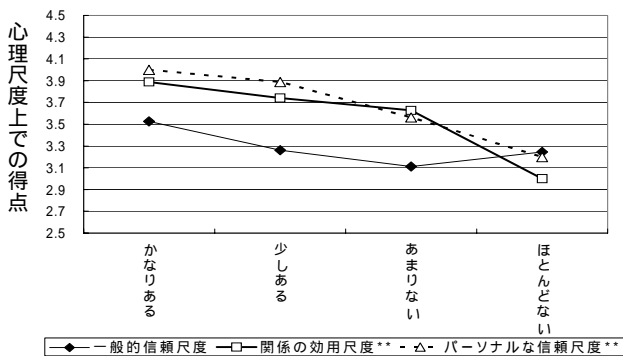
図6 里づくりへの意欲を規定する要因(B群+E群)

#### 4 里づくりへの意欲を規定する要因の構造

図6(前頁)は、集落への関わり合い(B群)と計画づくりに対する理解度(E群)を同じ図に重ねて表現したものである。同図で特に興味深い点は、B群の項目(+E4)とE群(図ではE1群)の項目とは、それぞれ里づくりへの意欲(C群)と強く関連していたにもかかわらず、B群とE1群との間にはほとんど関連がなかった点<sup>注11)</sup>である。2つの要因グループはいずれも里づくりへの意欲に対して影響力があったが、両者の間には関連がほとんどなく、それぞれ独立した要因として作用していることが推察される。

#### 社会的信頼特性と里づくり

図7は、分析3の結果の一部(里づくりへの関心の水準別にみた、各信頼特性の平均値)である。一般的信頼とは統計的に有意な関連は見いだせなかったが、関係の効用とパーソナルな信頼については、里づくりへの関心と有意な関連があることがわかった。信頼という切り口でみると、里づくりへの関心は「親しみ(パーソナルな信頼)と打算(関係の効用)の二重構造」によって支えられているといえる。里づくりへの参加意欲についても同様の図を得ることができた(但し、関係の効用のみ有意)。



注：凡例の\*\*印は1%水準で統計的に有意であることを示す。

図7 里づくりの関心水準別の信頼特性

表4(次頁)は、信頼特性(F群)と里づくりに関する項目群(B・E群)との関連性をCramerのV係数の有意水準で判定した結果である<sup>注12)</sup>。この表を見ると、B群：集落との関わり合いに関する項目には、広い範囲で有意のマークが付いており、両者に関連性があることを示しているが、

E群：計画づくりの理解度に関する項目とはE4住民参加のスタイル評価を除き、関連がない。E4はB群の各項目と関連していた(前掲図7)が、信頼特性との関係でもB群に近かった。

このように住民の信頼特性はB群と関連していたが、B群の項目は前報では「地域志向性」<sup>注13)</sup>と呼んだ項目群であり、集落自治へのコミットメントの程度を示すものである。信頼特性も集落との関わり合いもどちらも長期間かけて徐々に形成されてきたパーソナリティの特性であるという点で共通している。このようなストック的な人間関係が里づくりへの意欲を規定していた<sup>注14)</sup>。

ところで、社会的信頼はソーシャル・キャピタルの構成要素の一つである。これが里づくりに影響を及ぼしていたということは、ソーシャル・キャピタルとしても影響している可能性がある。この点については、今後の検討課題としたい。

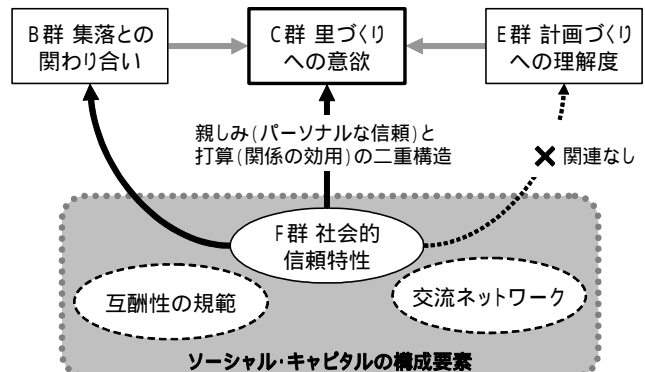


図8 里づくりに対する社会的信頼の作用

#### おわりに

計画づくりを「問題を解決するための処方箋づくり」とみなし、目的・手段間のロジカルな整合性を追求する論理的アプローチが今日の計画論の主流である。しかし、住民参加型あるいは住民主体型の計画づくりでは、論理的アプローチだけでは不十分である。なぜなら地域住民の意欲や社会的・心理的・組織的特性などの主体的特性も計画・実施の成否を大きく左右するからである。こういった側面からも望ましい計画づくりのあり方を再考する必要がある。本論では、計画論における行動科学的アプローチの意義を事例に基づいて明らかにした。

最後に、本論に対して丁寧にコメントして頂いた査読者に感謝したい。本研究の過程で文部省科学研究費（行動科学的アプローチに基づいた地域づくり型計画論の構築，代表：星野敏，課題番号：16580197）を用いたことを付記する。

【注および引用文献】

- 注1) 第1回大会シンポジウムのテーマ(1982)が「農村計画と住民参加」であったことが象徴的に示すように、農村計画学会設立当初から、住民参加のあり方が重要な課題として位置付けられてきた。
- 注2) 現在の参加型計画論には、例えば、参加過程の形骸化、参加主体の特性への配慮の不足、「計画過程に限定した参加」の限界、住民参加の制度的な裏付けの不備などの問題が指摘できる(星野 敏：21世紀の農村ビジョンと農村計画論の方向，農林統計調査，52(1)，12-18，2002)。
- 注3) 従来の計画論の多くは、暗黙のうちにこのアプローチを採用しており、その枠組みの中で合理的な計画づくりの手順や新しい参加型計画手法が提案されてきた。かつて筆者も早い時期に農村計画は問題解決学の視点をもっと明示的に導入すべきだという主張を展開している(星野 敏：参加型農村計画手法とTQC手法・考え方の応用可能性，農村計画学会誌，11(1)，50-59，1992)。
- 注4) 本文中の「前報」は、拙稿(星野 敏：集落計画づくりに対する意欲とその規定要因，農村計画論文集，4，133-138，2002)をさす。
- 注5) 最近の研究成果の中にも、行動科学的アプローチと関連が深い研究が少なからずみられる。例えば、長谷山は、地域活力向上の過程でマネジメントサイクルと意識レベルの変化を同期させて、意欲向上の方策を論じている(長谷山俊郎，「地域活力向上のデザイン」，農林統計協会，1996)。また、山田らは本論と同様、参加者の能動的な態度の規定要因を明らかにしている(山田和臣・藍澤宏・斎藤亮司：地域づくり

に対する能動的な参画態度の形成に関する計画的な研究、農村計画論文集，3，259-264，2001)。なお、既往研究のレビューは機会を改めて報告したい。

- 注6) 参加者の心理的要因として意欲、満足感、達成感、また、近年、有効性が明らかになりつつあるソーシャル・キャピタルに関連した要因として社会的信頼、互酬性の規範、交流ネットワークなどを行動科学的アプローチの当面のキーコンセプトとしたい。なお、ソーシャル・キャピタルについては、内閣府国民生活局刊、ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて、2002を参考にした。
- 注7) 山岸俊男：「信頼の構造」，212p，東京大学出版会，1998。以下、信頼の尺度に関わる説明は上記の文献の引用とその要約による。
- 注8) この点で、お互いの利益確保を目的として維持される「関係の効用」とは異なる。
- 注9) 本文中で「強く関連」とあるのは、CramerのV係数の有意水準(危険率0.1%未満)に対応している。
- 注10) E4は、里づくり事業のように集落自治組織的な枠組みの中で話し合いをベースに計画を策定するスタイルに対する評価(良い⇔悪い)である。E4を集落内での現行の意思形成スタイルへの評価と考えるならば、E4がB群と強く関連していた点はうなずける。
- 注11) B群とE1群の間でクロス集計を総当たりで実施したところ、3組(B1とE1，B1とE3，B2とE1)に弱い関連が確認されたが、それ以外で明確な関連性はなかった(図6参照)。
- 注12) それぞれの集計結果は表とグラフ(図7と類似したグラフ)で確認しているが、ここでは割愛する。
- 注13) 前報では、集落内のお付き合いの作法を心得ていて、伝統的な集落行事や慣習を受容し、地域に定住する意思を備えた特性を「住民の地域志向性」と呼んでいる。
- 注14) 当該地区では、パーソナルな信頼がもっとも明瞭に(里づくり項目と)関連していた。反面、一般的信頼は統計的に有意であるものの、順位逆転があって関連はあまり明瞭でない。社会的信頼のタイプによって計画づくりにどのような違いが生まれるのかを明らかにするためには、集落間の比較が必要となる。

表4 F群社会的信頼特性の3尺度とB・E群の項目との関連性(CramerのV係数による評価)

	F群 社会的信頼特性 : 有意水準1%未満 : 有意水準5%未満 - : 有意な関連はない ( )は順序の逆転がある場合	一 般 的 信 頼	関 係 の 効 用	パ ー ソ ナ ル	関連の素描
B群:集落との 関わり合い	B1 お付き合い・作法認知度	( )	-		作法認知度が高い程、高くなる
	B2 集落行事に対する満足度				行事満足度が高い程、高くなる
	B3 行事の継承	( )	( )		継承 or 簡素化が「分からない」のみ低い
	B4 定住意向		-		定住意向が強い程、高くなる
E群:計画づく りの理解度	E1 里づくりの事前説明	-	-	-	
	E2 集会出席の有無	-	-	-	
	E3 周辺事例についての評価	-	-	-	
	E4 住民主体のスタイル評価	-			住民主体型スタイルの評価が高い程、高くなる

Summary: Most of us consider that planning is to write out a prescription to solve local issues. Logical approach to pursue the consistency between the problems and their means is the mainstream of today's planning theory. But, in participatory community planning, the logical approach is not enough because such characteristics as enthusiasm of local people and social-, psychological- and organizational factors also affect the success or failure of planning and implementation. In this paper, the author made this point clear based on the questionnaire survey to the people of a planning community in Kobe city.